聖霊降臨後第19主日（特定25）　2011/10/23
聖マタイ福音書第22章34節～46節
於:聖パウロ教会　司祭　山口千寿

何年か前でしたが、当時のアメリカ聖公会の総裁主教であるグリスワルド主教が来日されました。立教大学が創立１３０周年記念事業の一環として招待し、名誉博士号を贈ることが目的でした。その機会に聖公会神学院でもグリスワルド主教の公開講演会が開かれました。「アメリカ聖公会が直面する宣教の課題」というテーマに惹かれて、私も聞きに行きました。

内容は、ジェンダーとセクシュアリティの問題、つまり１つは女性司祭の問題と、２つ目は同性愛の人を聖職に按手することの可否についてでした。女性の司祭按手については、最初の司祭がアメリカで誕生してから３５年以上たっていますが、今も反対する人たちが聖公会の中におられます。わたしは推進する立場に立っていますが、反対の人たちが自分たちの信念を堅持していることは尊重したいと思っています。

また、同性愛者の聖職按手に関しては、2003年にアメリカ聖公会で、自分が同性愛者であることを公言している司祭が、主教に按手されるという出来事が起きました。そのため、他の国、殊にアジア・アフリカの聖公会の反発を買うことになり、今、世界の聖公会は深刻な分裂の危機にあります。

これらの問題に入る前に、このことを考える前提として、聖公会という教会は、どのような性格を持っている教会か、ということについての話がありました。

つまり、聖公会の理念についてですが、聖公会という教会は、共通の祈りが一致へと導いている、という特徴を指摘されました。共に祈り、一つのパンをいただき、一つの杯にあずかることが、聖公会の一致を基礎づけているということです。ある問題についてみんなの意見が一致することが、聖公会を一致に導いているのではないということです。

つまり、聖公会という教会は、その中に多様性を含んでいるのだということです。多様性を持ちながらも一致している、それが聖公会です。いろいろな意見があったときに、その中のどれか一つへと決着を着けなければおさまらない、というのではないのです。意見の違いを含みながら、その緊張関係の中で教会生活が営まれるのが聖公会の特徴です。

昔は、ハイチャーチとかロウチャーチとか言いました。主教制とかサクラメント等のカトリック的な伝統を大切にする人たちもいたし、聖書や個人の回心を大切にする宗教改革の精神を保持してきたプロテスタントに近い人たちも、同じ聖公会にあって教会生活を送って来たのです。真理は一つの視点からだけで捕らえられるのではないのだ、ということを認めてきたのです。

更に言えば、神さまや人間に対するわたしたちの理解というのは、すべてのことが既に分かってしまっている、ということではありません。ヨハネ福音書では、弟子たちとの別れを前にして、イエスさまはこのように言っています。「あなたがた(弟子たち)には言っておきたいことが沢山あるが、今はあなた方には理解できない。しかし、その方、真理の霊が来ると、あなた方を導いて真理をことごとく悟らせる」(16:12～13)。ここでイエスさまが約束されているように、後になってから聖霊の導きによって分かってくる真理もあることを、教会の歴史は明らかに示してきました。

５世紀の半ばに、カルケドン会議という教会会議が開かれました。そこで決議されたことは、イエス・キリストは真の神であり、真の人である、ということでした。このような理解に導かれたのです。真の神である方が、どうして真の人間であることが出来るのか、という疑問が、当然、湧いてきます。神であるということと人間であるということは、両立し得ないことではないか、と考える人々も少なくありませんでした。ですから、神か人間かのどちらかでないと矛盾するではないか、ということで、いずれを取るかの選択が迫られたのです。

イエスさまが、真の神であられるならば、人間として地上に生きたイエスさまは、本当の人間ではなくて、人間の姿を仮にとられただけだ、人間の体を持ったように見えただけだ、人間となったように見えただけだ、と主張する人たちも現れました。

それとは逆に、イエスさまは真の人間であったのだから、真の神さまではなくて神に近い存在であった、と主張する人々もいました。

これらはいずれもが、あれかこれかという、どちらかで決着をつけようとした人々です。そして、教会はこれらの考え方を異端、つまり教会の正しい教えではないとして退けてきたのです。教会の正しい教えというのは、イエス・キリストは、真の神であり、同時に、真の人であるという、２つの矛盾すると思われる事柄が、同時に真理であることを教えているのです。

キリストが真の人間でなければ、わたしたちの救いとなることは出来ません。また、真の神でなければ、キリストのお示し下さった真理と救いは神さまからのものではない、ということになってしまいます。あれかこれかどちらか、ということではなくて、あれもこれも両方とも、という立場を大切にすることが、教会の伝統であったし、聖公会はその伝統に忠実であることを特徴としているのです。

グリスワルド主教さんの前置きの話は、そのようなものであったとわたしは理解しました。わたしの解釈も含んで紹介しました。

何故、このようなことを申し上げたかと言いますと、今日の福音書の後半、前半は「最も重要な掟」についての教えですが、後半の「ダビデの子についての問答」というところでは、今、申し上げてきたような、あれかこれかを取るのか、それともあれもこれもを取るのかと、イエスさまが迫っておられるように思われるからです。

イエスさまは、エルサレムに入城されて、まず最初に神殿の境内で商売をしていた商人の台をひっくり返して叩き出し、宮潔めをなさいました。そのような過激な行動が、イエスさまのどのような権威に基づいてなされるのかという問いをきっか

けに、イエスさまとサドカイ派やファリサイ派や律法学者たちとの間で、一連の論争が繰り広げられます。

そして今日の福音書は、その論争の締めくくりの箇所です。今まではサドカイ派やファリサイ派が論争を仕掛けてきましたが、今日のところでは、イエスさまの方から議論を仕掛けています。「あなたたちはメシアのことをどう思うか」、そのように尋ねて、ファリサイ派のメシアについての理解が旧約聖書の御言葉に従うならば、浅薄なものでしかないことを明らかにされるのです。そして、ご自身が神さまからのメシアであることを、暗に示そうとされているのです。

メシアというのは、元々は「油注がれた者」という意味です。旧約時代にはある人の頭に油を注ぐことによって、その人をある職務に就けました。任職の儀式として油を注ぐことが行われました。ダビデを始め、イスラエルの王さまに選ばれた人は、油を注がれてその務めに就かされたのです(サムエル記上6:13)。王さまだけではありません。祭司も預言者も油を注がれました(出エジプト記40:13～１５、イザヤ61:1)。

先週の旧約聖書には、ペルシャのキュロスという王さまが「主が油を注がれた人」として紹介されていました(イザヤ45:1)。このキュロスというペルシャの王さまは、バビロン帝国に代わって世界を治めるようになりましたが、捕囚となってバビロンに連れてこられていたイスラエルの人々、また他の征服された国々の人々に自分の故郷に帰ることを許可し解放しました。それで、イスラエルの預言者はキュロスが異邦人ではあるけれども神さまのみ旨を行う人、神さまによって立てられた王であると解釈して、油を注がれた人、イスラエルの解放者、メシアと呼びました。

イエスさまの時代にもメシアが登場することを、人々は期待し熱心に待ち望んでいました。当時、イスラエルはローマの支配のもとにありましたから、その支配を打ち破りイスラエルを解放して、再び栄光ある国を復興するような強力な指導者、かつての理想的な王であるダビデのようなメシアが登場することを期待していました。

ファリサイ派は、メシアはダビデの子であると、イエスさまの問いに答えました。イエスさまは、それではダビデは聖霊を受けて歌った詩編の中で、メシアのことを主と呼んでいるのは何故か、と更に尋ねておられます。

主と呼ぶ。それは神と呼ぶということと同じではないか。メシアはダビデの子であるならば、人間ではないか。主であるならば神から来たもの、神さまに由来するはずではないか。メシアは人間の子なのか、それとも神の子なのかと、迫ったのです。

ファリサイ派は、その問いに答えることができませんでした。あれかこれかという問いの前に、答えに窮してしまったのです。あれもこれもなどと答えることは、ファリサイ派には思いも及ばなかったのです。

マタイによる福音書は、その書き始めを、「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」という言葉で始めています。人間の血筋によればダビデの子、その人がキリスト、メシアであるイエスなのだ、聖霊によって身ごもった神さまに由来する方なのだ、という信仰を告白して、その福音書を書き始めたのです。メシアである方は、神であり人であるという、あれもこれもを生きた方です。その方の十字架によって、わたしたちもまた、御子に似たものとされるのです。父なる神さまは、わたしたちをも、今、神の子と呼んでいて下さるのです(Ⅰヨハネ3:1～2)。わたしたちもまた、あれもこれもを生きるのです。神の子としてこの地上の人間の歩みを送るのです。

その歩みが、今日の福音書の前半にある、全身全霊をもって神さまを愛し隣人を愛する生き方なのです。福音にふさわしい生活を送るために、わたしたちがどのようにして神さまを愛するか、そして隣人を愛したらよいか、心の中に思い巡らしながら、この一週間を過ごして参りたいと思います。